

ナゴヤ子ども応援会議 会議録

(司会者山田麻琴)

さて、ここからは第二部です。ナゴヤ子ども応援会議を開会します。

『ナゴヤ子ども応援会議』とは、市長が主宰して、市長と教育委員会が、共に名古屋の教育について開かれた場で話し合うための総合教育会議として、法律で設置を義務付けられた会議です。昨年5月に設置されました。

名古屋市では、名古屋の子どもたちの人生を応援していきたいという市長の熱い思いを込めて『ナゴヤ子ども応援会議』という名称を付けています。

この会議で話し合い、合意された内容については、市長と教育委員会が共にその内容を尊重し、実現に向けて努力していくことが求められています。名古屋の教育にとって大切な話合いの場ということですね。

さあ本来であれば、市長の主宰ですから、市長のご挨拶をと思ったのですが、本日、公務の都合上、少し到着が遅れているということで、市長が到着し次第、ご挨拶を皆様にさせていただきたいと思えます。

それでは、会議を進めていきたいと思えます。

まず始めに「ナゴヤ子ども応援大綱に基づく施策の現状について」です。

スライドを使ってのご説明となりますので、委員の皆様方にも、客席からご覧をいただいております。

本件は、教育委員会から説明をお願いします。

(事務局)

ナゴヤ子ども応援大綱に基づく施策の現状についてご紹介いたします。

ナゴヤ子ども応援大綱とは、法律により、全ての地方公共団体の首長が定めることとされた地域の教育、学術、文化の振興に関する総合的な施策の大綱で、本市では、昨年5月24日に策定しました。

この大綱では、「日本で1番子どもを応援するまち ナゴヤ」の実現のため、4つの柱を設け、本市の目指すべき教育の方向性を示しています。

市長と教育委員会は、この大綱を共に尊重し、大綱の実現に向けて努力していくことが求められています。

本日は、この4つの柱について、簡単にご説明するとともに、それぞれの柱に込められた理念の実現のための取組の一例をご紹介します。

大綱の第一の柱は、「教育をエデュケーションへ」です。これは、エデュケーションの語源、「外に引き出す」の精神のもと、子どもが考え、自ら学ぶ授業を推し進め、子どもたちの「生きる力を引き出す」ことを目指します。

本市では、子どもたちが自ら課題を解決する生きる力を育てるよう、従来型の一斉授業だけでなく、児童・生徒同士の意見交換や付箋・ホワイトボードなどを使った話し合い、自分の意見を効果的に伝えるスピーチの方法や、立場を明らかにした討論など、主体的・対話的な学習活動を通じて、社会で活躍するための幅広い学力を伸ばす取組を進めています。

大綱の第二の柱は、「なごやっ子の育ちと針路を応援する仕組みを確立」です。これは、多様化・複雑化する子どもの悩みの解決から将来の針路の応援まで、子どもたちの人生を丸ごと応援するものです。この方針の達成のため、日本初の常勤の専門家チーム「なごや子ども応援委員会」の充実に努めています。

なごや子ども応援委員会は、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールアドバイザー、スクールポリスの4職種の職員が、学校の教員と協働して活動し、専門的見地から子どもたちが抱える問題の未然防止や早期発見、個別支援を行う日本初の制度です。

なごや子ども応援委員会は、平成26年度に市内11ブロックの11中学校で始まり、現在は、この11校に加え、さらに25中学校にスクールカウンセラーを常勤させるなど、拡充を進めています。

応援委員会の活動内容については、この後、実際に応援委員会で活動しているスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーによる活動報告を予定しています。

また、貧困問題に起因して深刻化する子どもの問題に取り組むことを述べています。

貧困問題など困難を抱えた子どもたちへの取組は、健康福祉局や子ども青少年局など、市長部局において行っていますが、そのための学習支援事業などには、教育委員会でも基礎基本の定着を目的とする学習指導を行い学力の二極化

に対応するなど、子どもたちのサポートを行い、貧困対策事業に対して学校と情報共有や連携を進めます。

大綱の第三の柱は、「歴史や文化を大切に作る心を育み、世界にはばたく力を育成」です。これは、郷土の歴史や文化に誇りを持ち、自らのアイデンティティを確かにもってグローバル社会で活躍できる人材を育成しようとするものです。

教育委員会では、子どもたちが郷土に愛着を持ち、将来の名古屋を担う人材を育成するため、教科書にはない名古屋の歴史や文化を学んだり、平成30年度を目標に中学生が授業で活用できる副読本の作成を予定したりするなど、郷土の歴史学習の充実を図り、自らのアイデンティティの確立を目指します。

また、児童・生徒の発達段階に応じて、海外留学生を招いての異文化理解のための活動やインターネットを活用した交流、英語漬けの合宿イングリッシュキャンプや市立高校生をドイツやマレーシアに派遣しての企業実習など、学校教育の中に様々な活動を取り入れ、異文化への深い理解と国際社会で通用する知識やコミュニケーション能力を持ち、主体性や積極性、チャレンジ精神などを兼ね備えたグローバル人材の育成を進めています。

大綱の最後の柱は、「名古屋市教育振興基本計画の重点的取組事項を力強く推進」です。これは、この大綱の理念を具体的に実現していくため、本市の教育分野全般に関する具体的・体系的な事業を定めた名古屋市教育振興基本計画の着実な実施を図るものです。

名古屋市教育振興基本計画とは、学校教育のみでなく、教育環境の整備や教員の資質向上、家庭・地域との連携や生涯を通じた学びなど、本市の多岐にわたる教育の施策に関する基本的な計画として策定されています。

名古屋市教育振興基本計画には、5つの基本的方向とその実現を図る19の施策、施策を構成する約150の事業が定められています。教育委員会では、これらの全ての事業について、外部の有識者からもご意見・ご助言をいただきながら、毎年進捗管理のため、事業の達成度を数値化するなどして評価をつけ、「事務の点検評価」として公表しています。

27年度の点検評価では、おおよそ7割の事業が順調に進捗していましたが、約1割で事業の進捗の遅れが見られるなどの課題もありました。

なお、個別事業の進捗状況については、本市ホームページにて公表しておりますので、是非ご覧ください。

また、「学校トイレさわやか改修」を始め、大綱に特に記載された事業については、市長と教育委員会双方の尊重義務のもと、力強く進めていきます。

次に、昨年発生した市立中学校男子生徒の自死を受け、この件について開催された名古屋市いじめ対策検討会議と、同会議の報告を受けた教育委員会の対応について、ご説明いたします。

昨年11月、市立中学校男子生徒が「学校や部活でいじめが多かった」との書き置きを残し、自ら命を絶つという、痛ましい出来事がありました。

本市では、発生後、ナゴヤ子ども応援会議、教育委員会を緊急開催するなど情報の把握・対応に努めるとともに、11月18日、いじめ対策検討会議に事案の調査と検討を諮問しました。

いじめ対策検討会議とは、いじめ防止対策推進法に基づき設置された教育委員会の附属機関であり、いじめ防止の対策を検討するほか、本件のような重大事態における事実関係について、調査を行い、教育委員会に対し答申を行う機関です。この会議は、外部の有識者で構成され、精神科医や臨床心理士といった児童心理の専門家や社会福祉士など福祉の専門家、弁護士、元校長など多様な専門性を持った委員による話し合いを行います。

いじめ対策検討会議では、これら各委員の専門的見地に基づき、11月18日の会議開催以後、9か月余りにわたり、通算15回の会議や遺族・教職員、その他多数の関係者からの聞き取り調査を行ってきました。

そして、これらの調査・検討を経て、今年8月31日、いじめ対策検討会議より本件に関する答申がなされました。

この答申では、当該生徒に対するいじめ行為や当該生徒が苦痛やストレスを感じていた行為・出来事などの自死の要因や、自死直前の当該生徒の心情などの経緯を認定し、学級・部活動・学校全体の状況と担任や顧問の指導など、背景事情と問題点を指摘したうえ、再発防止に向けた提言を行っています。

再発防止に向けた提言としては、始めに、的確な児童・生徒理解とそれを踏まえた状況把握及び指導のための体制の必要性、すなわち子どもたちを多くの目できめ細かく見て指導することができる体制、多様な専門性を持った職員が

児童・生徒に多面的に関わることのできる体制、ハイパーQ Uを始めとする各種調査の有効活用とそのため体制の必要性を指摘しています。

次に、いじめや自死の防止に寄与する教育・指導の推進として、いじめ防止教育、自殺予防教育の継続的な実施、心の健康を育む実践的な教育活動の充実、基礎となる人権教育・道徳教育の重要性の再確認に取り組むことの重要性を述べています。

さらに、部活動における指導・運営体制の充実として、部活動の意義の再確認、指導者の適切な配置、技術指導における専門性の向上と外部人材の活用が重要であると指摘しています。

最後に、全体を通じて、教師がより信頼される存在になることや、学校全体として経営的視点を再確認することを求めています。

これら再発防止の提言を受け、今年9月2日、教育委員会として報告書を公表しました。また、報告書に基づく教育委員会の対応としては、10月5日付けで、報告書の内容の共有・校内体制の見直し・改善など対応を指示する通知を各学校に送付しました。

この他、よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケートであるハイパーQ Uの有効活用、道徳教育・人権教育の充実、自殺予防教育の促進などを実施してまいります。

それぞれの対応について、ご説明します。

「報告書の内容の共有・校内体制の見直し・改善」では、報告書について、全ての職員が共有することと、各学校における職員間研修を通じた共通理解を図り、点検活動表による校内体制の点検と改善を求めることなどを依頼しました。

次に「ハイパーQ Uの有効活用」についてです。「ハイパーQ U（学校生活アンケート）」とは、標準化された心理テストで、学校生活における子どもたちの意欲や満足感、集団としての学級の状態を測定します。

ハイパーQ Uは、多角的な分析により、クラスに自分の居場所を感じられないなど学校生活に不満足な児童・生徒や、友人・学級との関係などで意欲の低下した児童・生徒などを客観的に把握でき、保護者や教員、応援委員会など関係者が情報共有することができるため、いじめや不登校の未然防止と早期発見

やより良い学級集団づくりに役立ちます。また、年間複数回のハイパーQ Uを実施することにより、措置対応の効果測定が可能になるなどの効果が期待できます。

年2回実施しているハイパーQ Uについて、実施状況の調査分析を行い、分析結果を踏まえた改善点の周知と今後の活用のあり方について、学校へ情報提供を行ってまいります。

「道徳教育・人権教育の充実」では、いじめ防止教育プログラムの内容を基に、道徳の授業に関する資料の作成・配布を行います。また、効果的な道徳教育のためのハンドブックの作成の検討、いじめのない学校づくり、なごやINGキャンペーンを通じた人権感覚の醸成などに取り組んでまいります。

さらに「自殺予防教育の促進」では、自殺予防講演会の実施、中学生・高校生を対象にするストレスマネジメントのための授業の実施、健康福祉局とも連携した自殺予防のためのDVDを活用した授業の検討など、自殺予防教育を計画的・効果的に実施してまいります。

この他にも、「名古屋市いじめ防止基本方針」の見直しと、それを踏まえた各学校の「いじめ防止基本方針」の見直し・改善や、子どもたち同士のつながりを強める取組の拡充に努めてまいります。

悲しい出来事を二度と繰り返さないために、今回の報告書の提言を踏まえ、強い決意を持って再発防止に取り組んでまいります。

以上で、ナゴヤ子ども応援大綱に基づく施策の現状についての説明を終わります。

(司会者)

どうもありがとうございました。これら教育委員会の取組については、この後のパネルディスカッションにて、委員の皆様方にお話を伺ってまいりたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

さあ、そして、市長が到着したようです。ここで、河村たかし名古屋市長から皆様にご挨拶を申し上げます。市長、よろしく申し上げます。

(河村たかし名古屋市長)

はい、それでは、品の悪い男でございまして申し訳ございません。遅れまして、sorry to be late。すいません。

あの名古屋は、教育はペケにしてエデュケーションでいこうということでやっとりますけど、大変な挑戦を実はやっとりましてですね。マスコミがついてこれへんでいかんわな、本当に。いじめ問題を含めですね、あのよう分かんですけど、あとで議論がありますけどね。

2、3日前にもびっくりこいたのは、児童の優良表彰制度というのがあるんだな、本当に。これもびっくりこきましたで、私。優良表彰制度っていうの。学校が大体400ありますけど、名古屋は、幼稚園から高校まで入れると。その中の百七十何人ですか、これを優秀な人を誰かが選ぶっちゃうんですからね。えりゃあことをやっ取るもんだと言って、舞台の袖で、そいじゃ、わしが中学校だった時、昭和23年生まれで、誰が選ばれたんか、いっぺん調べてくれ言うて、言いましたけど。

いろいろ言いまして、しかし戦争で負けたでしようがないという議論出てくるんです。大変な苦勞の時代だったですから、やっぱり日本は。僕は昭和23年生まれです。だから、アメリカ型のエデュケーション、ええとこを伸ばすと、応援するという思考に届かなかったんではないかと、お上・下々で、という感じはせんでもないですね。自分の小さいときのことを思うと、ぎょうさん子どもがおりましたから。とにかく、団塊の世代で、どえりゃあ子どもで。それこそ、そうあんまり細かいtake careというか、あんまりそう記憶がないですね。生きていくが精一杯の時代だったという中でございまして、あんまり文句言っちゃしようがないですけど。

こないだも言いましたように、私はあんまりいばるものがだいたい元々嫌いですので、中学校時代は柿泥棒の主犯をやっとりましてですね。だから、とにかく大ゲンカやってました、学校の先生と。なんだあ、言って。何が悪い、言って、いたずらですけどね、要は。みんなが集まりまして。わしがよう言ったのは。柿泥棒といってもほとんど渋柿で。やった人は分かると思いますけど。だけど大曾根の辺でも、ようけ柿の木が生えとってねえ、子どもを誘惑するわけですわ。それで、みんなで、3パートに分かれて、一人は外で見張っと

る奴、乗り越える奴、あと木に登って実際に取る奴、ということで。たまに甘い柿がある。その時に、だけど絶対売ったらいかんぞ、言って、八百屋に、と言ったときでしたけど。一人わしの仲間で、今、居酒屋やっ取りますが、大の親友で、よう行きますけど、これが八百屋に売りやがってね。買う八百屋も八百屋で。ほんで、それで足がついて。あの時の桜丘中学校の校長、江尻保之助って名前までおぼえておりますけど。呼び出されて。お前、とんでもにゃあ、柿泥棒とは何だ、退学にする、と言われて。先生、やっぱりねえ、義務教育に退学はおかしいんじゃないの、と言ったらどえりゃあ怒ってました、校長。

僕らの時代は、そういう風だったんですけど。しかし名古屋の今回の挑戦です。子ども応援委員会という名前がついとりますが、それに限りませんけど、いじめばかりじゃなくて。あと、西山久子さんどこにおるか分からんけど、高原さん、そこにござるけど。西山さん、ああござるね。

私が、ロサンゼルス行って、誰も褒めてくれへんけどね。ほんとに、ロサンゼルスへ、こないだ立花さんという商工会議所の副会頭が行ったらしいんです。そしたらロサンゼルスの副市長が、河村さんみたいな人は初めてだと。要するに、本当に来て、普通は写真を撮ってくばっかだと。ちゃんとロサンゼルスの、ちゃんとゲットしてですね、内容を。名古屋でやろうとしとると。びっくりしましたよと、と言っておられましたけど。そんなことで。

私も正直言うと知らなかったですよ。アメリカにおいて、そういうその、教育の、サブジェクトですか、数学とか、英語とか社会とかそういう教科を教えない先生がいる。人生の応援団みたいな、大きくなったら何になるのとね。びっくらこきましたね、本当に。ほとんどだれも知りませんよ、日本中でこんなこと。これ議会の質問なんてありません。テレビ見たって、誰もそんなこと言いません。教員なんか何にも、一言も言いやせん。また後で言いますけれども。現代の七不思議が、こっだけ名古屋に1万人おるんでしょ、教員の、先生。ほんで、今までに何十万人といたんでしょ。日本中で何人いたの。その人たちが、なぜ、少なくとも、採用するかせんかはどっちでもええけども、アメリカでは、実は、こういう教科を教える先生じゃない、それはパートタイマーじゃなくて、ちゃんとした正規の先生がおって、人生を応援しとるんだということなぜ言わないんだと。ということは、本当に現代の七不思議じゃない

けれども、大変に謎なことですね。

もう一つ言っておくと、今、名古屋がこれだけ大変いいのも、トヨタ自動車のおかげでどえらい景気がいいまちで。正直言いまして、トヨタ自動車はどういうことだったか言いますと、やっぱり昔は、まだまだ、全然。モデルT、フォードとかが圧倒的に強かったので、全部車をバラバラに分解してですね、アメリカの車を。一個一個部品を全部チェックして。また、これアメリカ人って立派で、これ許したんでね。ほんで、追いつけ追い越せということで、今の日本、特に名古屋をつくっていったと。

ということで、私は役所で言っているんです。お互いにノーベル賞取ったわけでもない、ろくでもにやあ大人しかいないんだって。これは、私は零細企業やとるから分かる。同業他社がどういうことをしているのか、そういうことを必死になって勉強するんですよ。潰れちゃうから。だから、私はアメリカでどういうことをやっているんだと。いじめだとかそういうことをね。まあ、西山さんに言わせると、いじめだけじゃなくて、スプートニク・ショックでソ連の人工衛星に負けたと、アメリカが。その時に、家貧しくして孝子出ずということで、そういう風で発掘する、そっちも大きかったんだよ、と言ってましたけど。まあ、そういうことをやらないかんですわね。

(司会者)

そうですね。第I部で、斎藤教授が、戦後の日本ってすごかったという、その時代じゃないですか、市長って。

(河村市長)

そういう時代ですよ、私は。教育ってあらへんがね。

(司会者)

そのパワーがある人たちが、これからの子どもたちの未来をつくっていくということ。

たぶん市長このままだとずっとしゃべってらっしゃると思うんですよ。是非また後ほど。

(河村市長)

だから、アメリカならアメリカのやっぱりええところを学ぼうという気持ちがないといかんわ。ということになると、よういうと実は、子どもをほんとに応援するという気持ちがないんじゃないのと。トヨタはいい車を作ろうと思った、潰れるから。残念だけど、そういうことになりますよ、と。そういうことを私は言いたいんです。だから、名古屋の挑戦というのは大変に重要なところにきているので、だから失敗しないように。これを。ちゃんともものにしていかないかん。

(司会者)

はい。モデルケースになっていくと。

(河村市長)

いやいやそれも間違いはないですよ。けど相手方がおるもんで。潰されんようにしないかんですわ。

ということを、まあ、つくづく考える日々でございます。Thank you for listening。

(司会)

はい。どうもありがとうございました。また後ほどよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

さあ、それでは続きまして、「なごや子ども応援委員会活動報告について」に移ってまいります。

先ほどもご紹介しました、なごや子ども応援委員会の活動について、本日は、実際に現場で日々活動されておりますスクールカウンセラー前田悦子さん、そして、スクールソーシャルワーカーの山内美砂さんのお二人に来ていただいています。よろしくお願いいたします。

それでは、本日は、お二人から、子ども応援委員会での活動のご紹介、よろしくお願いいたします。

(前田悦子スクールカウンセラー (S C))

皆さん、こんにちは。檀上から失礼いたします。なごや子ども応援委員会、
スクールカウンセラーの前田と、

(山内美砂スクールソーシャルワーカー (S S W))

スクールソーシャルワーカーの山内です。

(前田 S C ・ 山内 S S W)

よろしくお願ひいたします。

(前田 S C)

本日は、なごや子ども応援委員会の概要や実際の活動について、報告させていただきます。

「なごや子ども応援委員会」は、平成26年度、名古屋の子どもの今と未来を守るための組織として生まれました。まずはじめに、その誕生について、経緯をお伝えしたいと思います。

名古屋でも、自死事案がありました。本市の河村市長はこの子どもの自死事案に心を痛め、未来ある子どもを守り、育てるためには一体、何かできないかと模索されている中、本市の姉妹都市であるロサンゼルス市の学校の視察に行かれました。ロサンゼルスを始め、アメリカの学校では、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーが、学校に常勤として配属されております。教鞭をとる教師とはまた別に、専門的な立場から、子どもの健全育成に関わっています。この制度を参考にしながら、ここ名古屋で、教員と協働しながら、子どもを守る制度を作れないだろうかという動きが始まりました。

子どもたちを取り巻く環境は複雑になっており、どんどん変化を遂げております。その問題も複雑多岐にわたり、問題解決の背景には、様々な要因が絡み合っています。この問題を解決していくためには、教員という一つの職種だけではなく、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールアドバイザー、そしてスクールポリスという4つの多職種からなるチームを作り、チームで応援していくことが、より問題解決に近づくのではないかという

考えから、応援委員会が発足いたしました。

今述べましたように、なごや子ども応援委員会は、4職種からなる専門家チームです。スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーにおきましては、後ほど活動報告をさせていただきますので、ここでは、スクールアドバイザーとスクールポリスの説明をさせていただきます。

スクールアドバイザーは、学校に対する外部からの意見や要望への対応、地域や家庭との連絡調整をいたします。スクールポリスは、警察官OBで、学校内外における見守り活動をし、必要に応じた警察との連携をいたします。

この4職種からなる子ども応援委員会は、チーム力を発揮し、子どもを中心として、家庭、学校、地域、関係機関をつなぎ、子どもが安全に安心して暮らしていけるようにと支援をしています。

次に子ども応援委員会の設置状況についての報告をいたします。

ご覧のように名古屋市には、小中学校合わせて371校、児童・生徒約16万人が在籍しています。16の行政区を基本に11ブロックに分け、11の中学校を設置校として応援委員会職員を配置いたしました。また、常勤の応援委員会スクールカウンセラーを単独配置している中学校、配置校を今年度は25校設けました。この設置校や配置校を中心に、名古屋で育つ児童・生徒の支援活動をしています。最終的には、名古屋市の全中学校に常勤のスクールカウンセラーを配置できるようにと考えています。

子ども応援委員会スクールカウンセラーの活動について、紹介したいと思います。

スクールカウンセラーは、児童・生徒の不登校や、学校内外での種々な問題行動などに対し、専門的な心理学知識や心理援助知識を持って、相談業務を行っています。また必要に応じ、医療機関とも連携をとります。教職員とは異なり、成績などの評価は行わず、保護者や他の教職員の方とも利害関係のない第三者的な立場にあります。外部性を保ちつつも教員との連携をとっております。そして、互いの専門家としての立場から見た生徒像を併せていくことで、生徒を多面的・立体的に見ていくことをしております。

ここで、活動例として、中学校になり、学校を休みがちになっている生徒の例を紹介したいと思います。もともと対人不安や緊張の高い生徒で、小学校の

高学年から不登校になりました。応援委員会はこの生徒が小学生の時から小学校や保護者と関わりを始めました。本生徒とも面識がございます。中学校に入り、中学校の担任と折に触れて相談を繰り返しました。担任はクラス内での生徒の見守りや声掛けを増やしてくださいました。また、生徒が担任に不安を訴えたときに、子ども応援委員会の部屋に連れてきてくださり、そこで少し休憩をとり、話をし、緊張を軽減させながら担任と協働してクラスに戻していくという体制を取りました。その一方で、スクールカウンセラーは母親との面談を行い、学校と家庭との協力関係を整えてまいりました。現在、この生徒は応援委員会の部屋に来ることもなく、元気に登校できるようになりました。

このように、クラス全体とその中にいる生徒を見守りつつ教育していく教員と、個々の児童・生徒の背景にある心理的な要因を把握し、それに対して支援をしていくスクールカウンセラーが、共に分業・協働しながら生徒の支援に当たっています。

さて、悩みやストレスは個人を押しつぶしてしまうときがあります。しかし、子どもたちは悩みやストレスを乗り越え、自分を大きく成長させていくことができます。子ども応援委員会は、日常の見守りを通し、個人を押しつぶしてしまうような事態には早期に気づき、教員とともに児童・生徒が自分自身で問題への対処能力を身につけていけるようにと支援をしています。

子ども応援委員会スクールカウンセラーならではの取組について、具体的に説明をさせていただきます。

まず最初に、未然防止活動です。友人に対する言葉かけや携帯電話の使い方、とりわけラインなどの問題が生じてきました。相手も自分も大切にすることをコミュニケーションの方法、ソーシャルスキル、それらを中心とした心理教育、ストレスマネジメントや怒りのコントロールに関する心理教育など、心の健康を守り、問題を未然に防止するための授業の支援をしています。また、生徒会活動の場など、授業以外の課外活動の場で、いじめ予防のグループエンカウンター実施の手伝いもしています。

次に教員との連携です。先ほどもスライドでありましたが、名古屋では、小学校高学年と中学生対象に年に2回、ハイパーQ Uという、学校生活アンケートを実施しています。このアンケート結果を分析し、教員と情報共有をしま

す。日々の観察から見られる児童・生徒像と検査結果を基に相談をしていく中で、生徒をより深く理解し、学校での生活がより充実したものになるようにと支援しています。その他にも折に触れ、先生方とは、情報共有をし、生徒の見守りや、いろんなアドバイスをを行っているところです。

最後に「針路」探しの支援です。針路は、単に進学先をどこにするというような目先のものではなく、今後歩いていく将来までも見据えた「かじ取り」のようなものです。山登りのようにたどり着く先をきちんと持っている、私たちは例え遠回りでも、どんなにつらくても、道に迷うことなく、前に歩いていくことができます。子どもたちが自分らしい針路を見出せるように、子ども応援委員会はチームとして子どもを見守り、また、相談や支援を行っています。

(山内 S S W)

「子ども応援委員会」におけるスクールソーシャルワーカーがどんな活動をしているか、お話ししたいと思います。

まず、スクールソーシャルワーカーという言葉自体になじみがないと思います。活動する中でも、「何をする人？何をしてくれるの？」と問われることがよくあります。2008年から文部科学省の活用事業が始まりましたが、仕事内容や活用方法がまだ十分に理解されていないのが現実です。ソーシャルワーカーは医療や福祉の現場などで制度や機関、人を結び、支援を調整して相談者の生活を良くしていく仕事をしています。なぜ、ソーシャルワーカーが学校に必要になってきたかという、現在社会で起きている様々な問題が、子どもたちの問題として学校に持ち込まれるようになったからです。

子どもの貧困、居所不明の児童・生徒、児童虐待、非行などです。こういった問題は教育の視点だけは、なかなか改善されません。スクールソーシャルワーカーはそれらの問題を「困った子ども」として個人の問題として見るのではなく、人と周りの環境の関係で生じているという視点を持ちます。スクールカウンセラーが本人の抱える心の問題を心理検査や心理療法などで解決していきませんが、スクールソーシャルワーカーは「社会」に着目して、人と周りの環境の関係性に働きかけることで、子どもの学校生活と家庭生活をより良くする支援を行っています。

子ども応援委員会の中では、相談を受けると、学校や地域、家庭など子どもの背景に着目します。関係機関や団体、例えば区役所、児童相談所、福祉事業所、地域の主任児童委員などとネットワークを作り、役割分担を調整します。また、就学援助、生活保護、ひとり親支援、福祉サービスなど、制度の活用を促します。

先生方が情報共有し、学校全体で子どもを支えていくための、校内ケース会議や、また、学校と関係機関が協力して一人の子どもを支援していくための連携ケース会議を開くのは、スクールソーシャルワーカーの一つの仕事です。

社会の問題の中でも、とくにスクールソーシャルワーカーの活動と関係ある「子どもの貧困」についてお話ししたいと思います。平成24年の調査によると、子どもの貧困率は、16.3%で6人に1人が貧困です。今の貧困は見えにくく、経済的な貧困だけではなく孤立している家庭の「つながりの貧困」も問題になっています。また、貧困の連鎖、ひとり親家庭の子育ての困難さ、福祉的な支援が、制度はあっても必要な人に届いていないなど、生活がなかなか良くなる現状です。貧困の問題は不登校、学習意欲が低下しているといった児童の相談としてスクールソーシャルワーカーに持ち込まれます。

具体的な例では、スクールソーシャルワーカーが家庭訪問し、母と面談したところ、最近離婚し、ひとり親家庭になったと聞きました。母は精神的に疲れ切っており、手続にも動けないため、福祉的なサービスを受けていませんでした。スクールソーシャルワーカーが母の気持ちに寄り添いながら、一緒に区役所に行き、児童扶養手当の申請、市営住宅の入居手続などを行いました。その後も家庭訪問を継続して見守り、生活が困窮してきたため生活保護受給につなげました。生活が安定し、母の気持ちも落ち着いてきたので、子どもも安心して学校に通うようになりました。

2つ目の事例は、家族に対しての暴言があり、学校にも通えなくなった中学3年生の事例です。母がひとり親で経済的にも精神的にも苦しく、本人も発達障害があり、進路のことが考えられず、自暴自棄になっていたようでした。そこで、学校、区役所民生子ども課、福祉サービス事業所、子ども応援委員会でケース会議を開き、お母さんと子どもも交えて進路に向けての話合いをしました。進学費用の助成・貸付の制度の申請、学習サポートの利用、家事の支援な

ど様々な機関が応援していくことを伝えました。母と子がたくさんの方が関わって支援してくれることを知り、前向きな気持ちになったようでした。生徒は学校に足が向くようになり、母も気持ちが安定し、高校に進学することができました。

スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの具体的な活動をお話させていただきましたが、4職種がチームになって対応するのも子ども応援委員会の特徴です。

具体的には不登校のケースを例にとると、スクールカウンセラーは子どもや保護者の心理的な状況を見立てる、スクールソーシャルワーカーは子どもの背景に貧困や虐待がないかを見ていく、スクールアドバイザーは学校がどのような解決を目指しているのかを聞き取り、地域の情報を集めます。スクールポリスは警察と連携し、非行がないか調べます、家の見回りもします、といったように役割を分担して、情報を集め、その情報をチームで整理、ケース会議をし、今の子どもの状況を見立てます。その見立てをもとに、学校とともに問題解決に向けての支援を考えます。支援は家庭・学校・地域・関係機関の資源を生かし、連携ネットワークを作りながら進めていきます。

文部科学省は、学校とスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門職がチームを組み、子どもたちの問題に対応する「チーム学校」を実現させようとしています。「なごや子ども応援委員会」は学校現場とは少し離れた位置取りをすることで、子どもや保護者の声を直接聞くことができ、学校の外の、周りの関係機関とも連携をしやすくしています。一方で、学校の中に設置されましたので、「チーム学校」の一員として先生方と役割分担をしながら、共に働くことができます。小学校・中学校両方で活動していますので、小・中を結んで支援することもあり、一人の子どもを、一つの家庭を、切れ目なく応援していきます。

設置3年目になり、子どもたちが、自分らしく生きていけるよう、将来を語り合えるよう、学校、家庭、地域、関係機関の皆様と「応援の輪」を広げていきたいと思えます。市民の皆様にも「子ども応援委員会」をよりよい制度にしていくお力添えをいただければと思えます。今後ともよろしく願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

(司会者)

どうもありがとうございました。前田さん、山内さん、今後ともどうぞよろしく願いいたします。今一度、盛大な拍手をお送りください。ありがとうございました。

さて、ここまで報告されました教育委員会の活動について、ここからは、市長、そして、教育委員会の皆様方とともに意見交換をしていきたいと思えます。パネルディスカッションに移ってまいります。壇上の方にですね、皆様ご登壇いただきましてお話をさせていただくということになっております。

準備の方、ステージでさせていただきたいと思えます。今しばらくお待ちいただきたいと思えます。

実は私事ではありますが、私も保護者です。保護者になって小学校に入ったんです。小学校に入って初めて気付くこと、そして子どもがどんどん変化していくことっていうのに戸惑ったりっていう、この4月からの何か月間かを過ごしてまいりましたが、今回このパネルディスカッションを担当させていただくということで、こんなに活動してくれていたんだというのが、実は、正直な気持ちでした。なんで私、もっと自分の子どものことなのに、入っていかなかったのかなあ、なんていう、そんな思いを込めて、すごく感謝の気持ちを込めて、ここからはですね、その教育委員会の取組についてのパネルディスカッションという形にさせていただきたいと思えます。

さあ準備の方、ステージ上も整ったということで。それでは、本日のパネリストの皆様をご紹介します。

河村たかし名古屋市長です。

杉崎正美教育長です。

教育委員の小栗成男委員です。野田敦敬委員です。船津静代委員です。梶田知委員です。小嶋雅代委員です。

また、本日は、会議の意見聴取者としてお二人の学識経験者をお招きしております。福岡教育大学教授の西山久子先生です。西山先生は、スクールカウンセリングの専門家です。そしてもうひと方です。大阪府立大学教授の山野則子先生です。山野先生は、スクールソーシャルワークの専門家です。

本日のパネリストの皆様方の略歴につきましては、配布資料によるご紹介をもって代えさせていただきます。

さあそれでは、議論の方に移ってまいりたいと思いますが、まず始めに、河村市長にお伺いしたいと思います。教育委員会の取組、スクールカウンセラーそしてスクールソーシャルワーカーの活動報告の発表をご覧いただきまして、ご意見をお願いしたいんですが。

(河村市長)

座ったままでええですね。今、話にありましたように、こないだちょうど22万人というようにいじめの件数が報告されましてね、いじめばかりじゃないけど。西山さんござるけど、家貧しくして孝子出ずという大変重要な課題なんですよ、相変わらずマスコミ、テレビ見てまして、新聞でも見てましたけど、まず、こういう。実は簡単なんです。専門職が要するというだけのことなんです。よう考えますと。学校の先生が全てやるのも結構だけれども、そんなスーパーマンでもなんでもありませんので、その指摘が全然にやあと。だから、非常にこれ危険じゃないの、実際は。名前まで言うと感じ悪いけれども、私がアメリカで気付かしまして、ノーベル賞でございませぬので、これはですね。まず分からないかんわね。ほんで、文部（科学）省のえりゃあ様に、なんでこんなことが、私も知らなんだと、要するにアメリカには専門職がおるということですわ、といいましたら、なんと答えたかという、それは、河村さん、学校は教師支配だからだと。教師支配。病院の例が出されて、杉崎さんおったわ、そこに。俺が言うとするの嘘じゃないでしょう。おったで。ほんで、病院のこと言っとる。病院だって医学だってそうでしょうと。実は、レントゲン技師だとか血液検査の技師だとか、心電図の技師だとか、医者よりも優秀な人が沢山いるんだと。しかし、やっぱりドクターの、医師の支配と。同じように学校は教師支配だから、だからどうしても河村さんが言っているような、アメリカ型の仕組みというのは、これみんな校長になっていくんでしょよ、そういう人たちはそれがだめなんだと、と言っていた。なるほどと、いうことで。そりゃしょうがないということで、国会議員時代はエデュケーションと教育との差も違いは気付いとりましたけど、日本は、ほんだでこれだめだなあと。ということ

で、まあ文句ばかり言っとっちゃいかないので、名古屋で取り入れようということになってきた。

ほんで、私は始めに聞きたいのはね、法律上の規定であって市長が主宰するということになってまして、普通は、前回も述べましたけど、私はそんな型どおりの文章なんて読まへんぞ、言って。そんなことやるはずがないじゃないかと。給料も安くなると、人よりようけ働くようになるんですよ、実は。なぜ日本で、こういう名古屋でやろうとしておる専門家によるね、この子ども応援委員会、いま発表ありましたけど、これを誰も主張しないのか、と。これなんでもかちょっと教えてもらいたいね。だって、そこから始まっていかないと、日本における課題が出てこんと思うんですよ。それとこの子ども応援委員会やっていく上においても、やっぱり今度、課題が出てきますのでね、これ絶対。それを解決するようにならんとね、と。零細企業を経営してきました私から言うところなる。だで、議題のナンバーワンはなんで日本中でだれも言わないのか。テレビ、新聞、国会、地方議会、テレビに出てくる人なんか、誰も言いませんでしたよ。僕が感心しておりますのは、尾木ママさんだけは、こないだ、某政党と一緒に来ましてですね。話したら、ええっ言ってですね、その、専従の、専門の、スクールカウンセラー。そんなだったんですかあって言って。で、テレビでこないだしゃべっていたらしいですよ、全国放送で。あの人がだから、非常に正直ですよ。正直。だから初めてですよ、そういう人に会ったの。というのが、ちょっと始めの問題提起ですね。私から言いますと。

(司会者)

なるほど。ありがとうございます。スクールカウンセラー、そしてスクールソーシャルワーカーって実は私たち、保護者とかは、なかなかまだ耳慣れなくて。

(河村市長)

常勤なんですよ。ここでちょっと間違えてはいけないけども。日本中にスクールカウンセラーっている。そういうので間違えやすいんだけど、非常勤ですから、これはですね。努力されておるけど、週いっぺんですわ、大体。や

っぱり無理ですよ、それは、どんだけ努力したって。高原さんそこにござるけど、非常に高原さんの言ったことで、僕、今覚えとるのは、河村さん、子どもさんのいじめの苦勞って、そういうのってね、そう簡単に分からないんだよ、と言うて。これは専門家でない。ほらそうだわなあって言うて。そんなのは。だから専門家が要するという話で、日本のスクールカウンセラーは、努力はしとるけども、その週一回ですから、原則として。だから、同じ言葉でだまされてはいけませんよ。アメリカのスクールカウンセラーと日本のスクールカウンセラーは全く違うと思った方がいい。私も、高原さんの書いたアメリカのスクールカウンセラーの本がありますけど、それを何べんも読みまして。それで初めて分かる。名古屋の教育委員会からは一言も聞いておりません。言っときますよ。だれも、言った教師はゼロ、ということですよ。

(司会者)

なるほど。さあ、それでは、その専門家が今日お越しただけにいるということで、その専門家の方々のご意見を伺っていきたいと思います。本日お越しの山野先生、そして西山先生は、今回このなごや子ども応援委員会を始めるに当たって、様々なご意見を頂戴していると伺っております。

まずはですね、スクールソーシャルワークを専門家とされております山野先生に、この子ども応援委員会におけるスクールソーシャルワーカーの意義、市長の発言あったことから踏まえてご意見頂戴したいんですけれども。どうぞよろしくをお願いします。

(山野則子大阪府立大学教授)

はい、ありがとうございます。大阪府立大学の山野です。どうぞよろしくをお願いします。資料を提供させていただきました。資料と書いて、ナゴヤ子ども応援会議・教育シンポジウムと書いていて、私の名前があるものです。せっかく現場のおふた方さんにご報告いただいているので、そのことにも触れたいと思うのですが、今、市長がおっしゃられたことからちょっとお話ししたいと思います。国の資料ですが、皆さんに視覚的に分かりやすい方がいいかなと思って提示しました。内閣府の子どもの貧困の対策を作る委員であったり、中教審

の委員であったり、今、チーム学校のガイドラインを作るなど文科省や内閣府の委員をさせていただいています。そういう立場もあって、この図を載せています。まず2番目の図は、学校教育だけではないですよという意味です。家庭教育、社会教育を連動させますよという図なんです。スライドナンバーでいうとマル3。これがチーム学校と地域とのつながりです。今日のご報告でもありましたが、名古屋市さんのすばらしい地域や子どもたちとのつながりをお聞きしましたが、学校の中のチームだけでやるのではなくて、地域とつながってどんなふうに展開していくかということが、話題になっています。マル4が、学校プラットフォーム、これもちょっと後で言いますね。まず、その次のページ、今、市長がおっしゃられた、マル5ですね、これが教員の割合を示しています。西山先生という、ロサンゼルスにいらっしゃった大専門の方を横にししながら、私がアメリカのデータをお見せするのはちょっとお恥ずかしい気がしますが、アメリカのイリノイ大学とは、うちの大学提携を結んで、スクールソーシャルワークで交換留学、毎年、行ったり来たりしております。

そんな関係で、この図にあるように、教員というのは、学校職員は教員と教員以外が半分ずつなんです。イギリスでも貧困対策のことで行ってまいりましたが、イギリスもアメリカも教員以外の方が学校には半数いる。スクールソーシャルワーカーとか、スクールサイコロジストであるとか、いろんな人がいるんですが、例えばイギリスの場合だったら図書館司書が多数いる。次のページで写真があるんですけど、図書の本が並んでいるのは、廊下が図書館になっていて、ガラッと教室を出たらこの風景なんですね。一番左の写真。こんなふうに、子どもたちがいつでも本になじめる。貧困対策ですから、本がないとか、お家に帰っても誰もいないというような子どもたちをケアできるように、普通になされている。これにはスタッフとして図書館司書がたくさんいるからできる。また、TA（ティーチングアシスタント）だったり、メンターといって、先ほどもちょっとご紹介がありましたが、学生同士のボランティア、中学生の子が小学校の子を教える、高校生が中学生を教える、というような仕組みを学校にも入れている。日本では、地域づくりとして、なされているところもあります。メンターっていう制度がかなり入っていて、ちょっと先の先輩。冒頭、教育シンポにもありましたが、ちょっと先の先輩が関わるように施策の中で仕

組まれている。こんなふうに、学校の中で仕組みとしてすべての子どもたちに提供できるよう作っていけないかと思います。そこで、二点、今の市長のお話から、問題提起というか感じたことを伝えます。一点は、おっしゃられるとおり、このチームの、先ほどの図でいうと3の今、日本でやろうとしているマル3のチーム学校の機能をどんなふうに高めていくか。今日、素晴らしいご報告がありました。文科省でも、名古屋市さんの取組は参考にしています。確実に、この常勤で置くってということが、どうなっていくのかっていうのは、すごく注目しています。スクールソーシャルワークの立場でいうと、全国で1,400名しかいません。しかも大阪でいえば、週一回、週二回という勤務ですから、先ほどご報告のあったような活動はできない。やりたくても、子どもさんや親御さんに寄り添ったり、代弁して、気になっているところや不安で行きにくい場所に一緒に見学に行ったり、例えば発達障害者支援センターと一緒に回ったりするようなこと、つまりアドボケイトとって、ソーシャルワークの一つの仕事なんですけど、それができない。名古屋市さんは、常勤だからこそできるってということが、先ほどのご報告から、よく伝わってきました。チームでこの、三角の下の図ですね、ロサンゼルスでも同じだって、先ほど西山先生からお聞きしました。イリノイのモデルですけど、一番下がティア1で、すべての子どもたちが受けるプログラム。一番上がティア3ということで、問題の抱えている子どもたちの受けるプログラム。スライドのマル6ですが、ティア1、ティア2、ティア3の三角図となっていますが、これを振り分けて、これから名古屋の応援チームで、こういったことができいくんじゃないか。それが前提に考えられます。そのうえで、繰り返すこと、常勤だからこそ、ティア3の問題性の高いところも丁寧にアドボケイトできるのではないかということです。

2点目はですね、先ほどから言っている、写真の方ですね。マル7、マル8のスライド見ていただいて、チーム学校、チームだけではシステム疲労してしまっています。問題のある子どもだけの対応を考えるのでは未然防止ができない、そこが必要でアメリカではすでに手が打たれているということが先ほどの図からお分かりいただけると思うのです。日本の場合は、まだまだ遅れていますから、チーム学校といったら問題事案にだけ、対応するみたいなイメージに

なっています。それを広げて、地域人材だとか、メンターとか、図書の人たちをどんどん入れて、こういった学校を拠点にしたサービス提供できる、そういう仕組みが、これから先、すでに個々に取り組んでおられる名古屋で、着実に制度として、仕組みとして形を作ってくださいたらと思います。つまり、応援チームという形式は、ティア1からティア3にプログラムを提供していくことができ、ティア1にも未然防止のためにプログラム提供できるのではないかと思います。他ではここまで徹底してチーム形式をされていないことですから、注目がされているところです。こうしたことを仕組みに入れ込んで、その先には学校プラットフォームみたいな図が、見えてくるんじゃないかなというように思いました。以上です。

ありがとうございました。

(司会者)

どうもありがとうございました。これからまだまだやることはたくさんある、そしてそれをやった先に子どもたちにとって一番ベストな環境をつくることができるということで。どうもありがとうございました、山野先生。

引き続きまして、西山先生にご意見を頂戴したいと思います。西山先生はスクールカウンセリングのご専攻ということなので、そちらからのご意見を頂戴したいと思います。お願いいたします。

(西山久子福岡教育大学教授)

失礼いたします。今日来させていただいて。河村市長のほうからご連絡をいただいて、「何か日本でこれまでやられてないような取組になると思うけれども、子どもたちがとにかくしっかり学校生活の中でうまくやっていけるようになるというような方向性を、これまでしてきたことというのを少し横に置いて考えたいんだ」というお話を伺ったのが、平成26年のことでした。そこからというと、ずいぶんたくさんの方が進んできたなと思います。当初、「河村先生、いきなりは大変なので、まずは小さく、パイロットプログラム化にしませんか？」とか申し上げたんですけれども、そのあたりは、「いやいや、とにかくしっかり11校行きましょう」と言われました。今、すごくたくさんの子

ども応援委員会の方が一生懸命に研修を受けておられます。しっかりと児童生徒や保護者、そして先生方の相手の話を聴くってという聞き方のことだけでなく、学校の中でどういう支援でどんなふうに活用したらいいのかということであったり、スクールカウンセラーをはじめ各スタッフの皆さんが、どんどん専門性を今、高めてこられている。そして、スクールソーシャルワーカーの方も、「名古屋型のスクールソーシャルワークというのはどんなことをしたらいいか？」というのを、それぞれにスクールアドバイザーの方やスクールポリスの方と一緒に考えてこられているというのは大きな進歩だと思います。

少しスクールカウンセラーというところに関して申し上げますと、先ほど整理をちゃんとしながら考えないといけないと市長がおっしゃったんですが、文部科学省が臨床心理学などを専門に学ばれた方を中心に推進してきた、スクールカウンセラー事業があります。これがかつて週8時間ほど学校に入っていました。最近はその自治体も、予算的にも厳しいので、1週間に4時間であったり、8時間だったのが半分になってしまっているというような状態にあるというのはお聞き及びになった方も多いと思います。

外部から訪問型のカウンセラーとして、学校関係者の方によく言われたのは、「あなたが来てくれるまで待っていると、子どもたちの悩みは解決する前に（元気が）枯れてしまうんだ」と言われたりして、本当にそういう時間的なカバーの厳しさということを感じた経験があります。私自身は専任でスクールカウンセラーをした経験と、それから非常勤でスクールカウンセラーをした経験とがありますが、やはり全く異なった動きだなというふうに思います。今日のご発表の中にもありましたけども、悩みの解決はスクールカウンセラーの仕事なのか、というところがまず一つあります。スクールカウンセラーの仕事として悩みの解決をするのは、目的ではなくて、その子どもさんが自分の出会う課題を克服していく力をつけることです。自分の課題の乗り越え方をつけるのを学校現場で後支え（まさに応援）することと、将来的には自分で考えられるような力をどうやったら付けられるのか、といったことを学校の中で支えるのです。例えば相談を受けたときに一緒に考えながら、次に会ったときはもう少し自力でできることを増やしていくとか、ご自分のいろんな強みや課題に気付いて、より世の中において自分を活かしやすく、そして生きやすくしていく、

というところがとても重要だと思います。スクールソーシャルワーカーも、スクールカウンセラーも、仕事のタイトルの頭にスクールが付いていることが重要です。教育現場の中では、問題状況が解決したというプラスマイナスゼロのところを目指すのではなく、少なくとも義務教育を終わるまでに、よりよく成長して自分の人生をうまく乗り切っていけるようになる力を、備えておくことを目指さなければいけない。そういったようなときのアプローチとしてスクールカウンセラーは、学校の中での心理的なところをベースにした支援を行っていく、スクールソーシャルワーカーは、福祉的な視点からの支援を行っていくというような形で、ある程度役割を整理していくということがいま少しずつ進んでいると思います。ただ、先ほど山野先生もおっしゃったように、どうしても現状としてまず課題の深刻なところから対応をしなければいけないので、悩みの解決を一緒にやっていくというところに今まだ少しとどまっている段階です。よりよく成長するために、例えば、キャリアガイダンスによって進めていくことがとても必要になっていく。このあたりが先ほどの話の中でスクールカウンセラーがやっている仕事の中で、進路支援を先生方やスクールソーシャルワーカーを始めとする専門家集団で行った事例に表れています。たぶん究極の目指すところはその人生の歩み方を考える力と切り開く力をつけることです。

自分の目標に近づくための支援とは、例えば様々な自分が進路相談のなかで困難に出会った時に、どうやって進めるかとかを考えていくことだと思います。答えの出ない問いの苦しさを克服するストレスマネジメントの方法や、どんな選択肢の中で何を選んで自分はこれを選び切ったらいいのかというのを一緒に考えることが特に中学校段階での支援だと思います。お一人だけで考えることは難しいので、担任の先生それからスクールカウンセラーなどと考えることが有効だと思います。先ほど市長がおっしゃった、よりよく、良いところを伸ばすという形の教育が重要だという話は、まさしく今、文部科学省が言われているところで、学力は世界の中でもトップクラスながら、自己肯定感はボトムに近いという現状をいかに克服するかが、私たちの目標だと思います。子どもたちが自分の力を理解し、よりよく成長するために、それを伸ばしていくことが子ども応援委員会の目指すところと思っています。

名古屋市のご提案に大きく影響して、今回山野先生が出してくださった、資料の3番のところの、『次世代の学校・地域創生プラン』が出てきています。法律も改訂をしながらより良く進めていこうとする国の取組ですが、これまでの学校での役割の整理を少しまた進めていくということです。名古屋市の取組は、大変な挑戦と市長はおっしゃいましたけども、アメリカの取組の良い点を参考にしつつ、日本ではやはり先生がその方の人生をトータルに考え、その方の様子を学級担任としてトータルで見ながら協働するというお力も発揮されているので、そういった先生方と相互の専門性をいかして協働していくかという辺りが、これからの目指していきたい課題になるかと思います。

この名古屋の取組は、次世代に向けて日本の教育をどうするのか、子どもたちがどういうふうに自分で自分を成長させていける力を学校にいる間につけるかということといえます。どうやってそれを実践するかが、名古屋の挑戦といえるかと思います。道なき道を走るといったことなので、様々なお立場の皆さんとこうやって話をしながら進められているこういった会議は重要な機会であると思っております。以上でございます。

(司会者)

西山先生、ありがとうございました。

(河村市長)

ちょっといい、わし。これ見とって、あの今、山野さんの3のやつですよ。ね。チーム学校の方でしょう。この中の真ん中の下の方に、その教員をバックアップする多様なスタッフということで、このソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーを位置付けとるんだけど。これでええのか、僕は、これ教員は教員でやとるんであってこれは、両方で協力するいうんは重要ですけど、なんかこれ見ると主従関係みたいですね。教員が主で、それを助けるのが、というのだけ。僕はそういう認識ないんですけど、全然、これは。教員ってそんなえらいのかと。これは別に数学や理科や社会を教えていただくのは結構ですけど。人生大きくなったら何になるのとかね、それからいじめの苦しみなんかを見抜く才能だって、そういうのあるんですか、そもそも。だから私は、もし文

部（科学）省だとすると、これやっぱり一つのところからよう抜け出しとらんな、いうふうを感じるんだけど、山野さん、どうだいこれ。

（山野教授）

ありがとうございます。おっしゃるとおりですね、今、私、国の会議でも、何かこう、誰のための話ですかって言い返さないと、教員が主語になってたり、あるいは、やっぱり教員がしないってという発言が、何回も出てくるんです。チーム学校をどうするかっていう議論なのに、やっぱり教員がっていう話が何回も出てくるので、本当に率先して名古屋がモデルを見せてくださったら、と思います。是非、名古屋発で、どんどん出していただけたらと思います。

（司会者）

ありがとうございます。でも、まだ今のお話を伺っていても、市長がおっしゃったように、本当に土台の部分だと思うんですけど、この土台をどのように固めていくのかっていうことで、その上に積み上げていくものがどのように変わっていくのかなあっていう、一番大事な時期なんだなあということが良く分かりました。

こういったご意見を伺ったうえで、杉崎教育長にお話をご意見を頂戴したいと思います。このなごや子ども応援委員会の今後、どのように広がっていくのか、またですね、本日スライドの方でもご紹介をさせていただきました、いじめ対策検討会議の報告を受けての教育委員会の対応について、あわせてご発言いただけますでしょうか。

（杉崎正美教育長）

はい。それでは私の方から2点あると思うのですが、1点目の子ども応援委員会の展望ということですが、先ほどスライドにもあったように、11ブロックに分けて、それぞれ配置して、スクールカウンセラーは36人まで増えたということもあります。この先も、110校、中学110校に、計画的に拡大していきます。この前、4つの職種のうちのスクールポリスの方、11人と話

す機会がありまして、スクールポリスは、先ほど説明があったように常勤ではなくて非常勤です。警察のOBということで、皆60（歳）過ぎの方なんですけども、齋藤先生の話じゃないですけど、雑談する力っていうのは非常に中学生にとって大事かなって思っています。話を聞いていたら、スクールポリスのおじいちゃんたちから見ると、孫みたいなものだっておっしゃっていただきました。非常に中学生に声をかけやすく、雑談がいつもできるので、中学生もなついて、非常にいいなあっていうのを感じました。そんなようなことで、これからも応援委員会は、財政状況厳しい折ですけど、きちっと増強していきたいなと思っています。

先日も、文部科学省の事務次官が中学校に視察に見えて、現場の、先ほどご説明いただいた山内さんとかですね、お話をされて、非常にいい取組だということで、見ていかれました。

ということもあって、これからもやっていくんですけども、一つ課題は、どんどん、どんどん今増やしているものですから、なかなかいい人材をきちっと確保するってことが非常に難しい状況でございます。やはり急速にこうやりますと、いろんな人材が入ってきてしまってますね、やっぱり先生たちとの信頼関係が一番大事だと思いますので、やはりいい人材をきちっと確保していく、先生方と、地域とも信頼関係を持ってやって、常に子どもがどうかって、子ども中心に据えて議論ができるような、子どもを優先にやれるような、そういうふうにしていきたいなと思っています。

名古屋市立大学も、来年度からスクールカウンセラーの養成ということで、大学院を開設する予定です。10人から始まるんですけども、そうやって養成しても、大学院を出たらすぐに、スクールカウンセラーをいっばしにやれるっていうこともないので、やはりそういう人材の確保育成っていうのは今後非常に大事だと思っています。

もう一つ、いじめ対策検討会議の答申に基づく対策ですけども、それも先ほどスライド見ていただいたとおりでございまして、いろんなツールとか、いろんな取組をやるんですけど、要は子どもに心から寄り添ってやるかどうかっていうことかと思ひまして、そこら辺がきちっとやれば、きちっと対応できる

でしょうけども、やはりそういう気持ちがないと、また同じことを繰り返してしまう可能性もあるんじゃないかなと思っています。

11月12日からなんですけども、実はいろんな、やっぱり子どもたちを見る多くの目が必要だろうということで、学校関係者、子ども応援委員会だけではなくて、地域の子どもたちの異変に早期に気が付いたりとかできるようなふうにしていきたいということで、実は名古屋市の子ども会の皆さんが取り組んでいただけるということで、学校外でも、子どもたちと接する機会の多い子ども会の皆さんが、サポーターになって登下校時ですとか、放課後の日常生活の中で異変に気が付いたときに、子ども応援委員会に連絡をしてもらおうというようなことを、この12日から始めようと思っています。そのようなことをやりまして、子どもたちが毎日いきいきと学校に通えるような、そういうことに取り組んでいきたいと思っています。以上です。

(司会者)

杉崎教育長、どうもありがとうございました。本当に点ではなく面で、というところだと思うんですが、これから本当に期待をしておりますのでどうぞよろしくをお願いします。

さあ、それでは引き続き、教育委員の皆様方にもご意見を頂戴したいと思います。

小栗委員にお伺いしたいと思います。小栗委員は、企業経営者として、普段から社員の育成にご尽力されていると思うんですが、そこから、「教育をエデュケーションへ」というナゴヤ子ども応援大綱にも一番に掲げられておりましたが、自ら学ぶ授業を進めていくって、すごく簡単なように聞こえてすごく難しいような感じがしますが、どのようにお感じでしょうか。小栗委員よろしくをお願いします。

(小栗成男委員)

はい。教育委員の小栗でございます。私は2年半(前)に教育委員にさせていただきまして、残り1年半という期間の中で何ができるかというふうに思っております。

実は、先ほど齋藤先生が、お話になりましたジャンプの件、皆さん覚えていらっしゃると思いますが、実は95%の日本人が「どこがかゆいですか」と言われて、言わないと。じゃ残りの5%は誰かという、実は私残りの5%で、河村市長と同じで、「型やぶりに生きる」という本を出してありまして、これ176ページに書いてあることをちょっと読みながら今の質問に答えたいと思いますが、子どもの教育について、私は今組織の話とか先生方からお話ありましたが、私は実際に子どもがいったいどういうふうに将来育ってほしいかなあという視点で少しお話をさせていただきたいと思いますが、この176ページに書いてあるのは、先ほどの95%の人に当たるかは別といたしまして、「人と同じだと安心する「横並び主義」」とか「謙遜しすぎ主義」とか「曖昧・うやむや・遠回し主義」とか「どっぷりネガティブ主義」だとか「いまになって後悔主義」だとか「言わなくたってわかるだろう主義」。ま、こういったことがこの176ページに書いてあります。で、それが何につながるかと申しますと、実は先日、中区に正木小学校という所がありまして、教育委員会の皆さんにいろいろ話を伺ったところ、実は日本人のしゃべりがあまりうまくない。私は企業経営者でありますので、何が大事かって、社会人になったときに、先ほど（齋藤）先生も部活をやっている人たちは積極的だし、なかなか社会にいつてもうまくいくという話がありました。実際に、体育系で部活をやってきたという人たちは、やはりものをはっきり言ったり、自己主張をしつかりする、責任感が強い、というふうに私、企業内でも感じております。

そこで実際に正木小学校に行って、アメリカですと、皆さんご存知のように、パブリックスピーチとかパブリックスピーキング、人前でどのようにやって話すとか、公的なときにどうやって理論立てて話すかということが、非常にアメリカの教育ではされております。そういったことを見習いまして、これも、河村市長がアメリカから帰ってこられてのご提案だと聞いておりますが、非常にスピーチを真剣に行っていました。特に私は、1年生、3年生、6年生のスピーチの場面を実際に見てきまして、先生たちともコミュニケーションし、実際その子どもたちがやっている姿も見てきました。そういった子どもたちが、どういうふうに将来なっていくと企業でうまくいくのかなというようなことも含めて聴きましたところ、その正木小学校のテーマ、これが面白かった

んですね。「お鍋に何を入れるか、お鍋の具に何を入れるか」というテーマで話をしました。ここで大事なのは、その具がだいたい4つか5つか出てくるんですけど、シイタケだったらシイタケでいいんですが、何がよかったかといいますと、一方的に話す人は多いんですが、そうではなくて、ここで大事なことは、聞く側がですね、相手が何を言いたかったのかっていう、きちんと双方向になっている、というのがとてもよかったです。

例えば4人の生徒が、4つの具について話をするんですが、受ける側に、「じゃあ皆さんどの具が一番入れたいですか」というと、この4人の人間が考えて理論立てて、例えばシイタケならシイタケが一番強くいきたいっていうと、スピーチが終わった後に、生徒に、この具は、何に皆さん一番印象に残りましたかって。そうすると、意図したシイタケ側のスピーカーが、今度聞く側が同じように合致して、やはり同じようにシイタケだ、これがとてもスピーチの中で、双方向で大切なことではないかなあという風に思いました。

例えば、単純に3分間スピーチをしてくださいっていうと、それはできると思います。しかし、ここで学んでいかなきゃいけないのは、双方向で話す側と聞く側がですね、同じように意図がつながっていくというようなことをされておりまして、こういったことがどんどん広がっていくといいかなあ、というふうに感じさせていただきました。

一方、アクティブラーニングにつきましては、もう既に学校の先生方とお話しますと、もう積極的に課題解決型で、特に新しい言葉にはなっているんだけど、昔からやっている、というようなお話がありました。特に私が企業家として感じるのは、例えば河村市長なんかそうです、型やぶりですよ。でも5%の人たちが、実は企業でも社会でも世の中を引っ張っていつているケースがある。したがって、冒頭申し上げましたように、これからのスピーチとかアクティブラーニングの中には、決して人のことも聞く耳は持つんだけど、自己主張をはっきりしなさい、言いたいことをはっきりしなさい、95%のチャンプーのかゆいところ言えない人間ではなくて、5%のようにはっきり自分でものを言えるような人が育っていくように、是非期待をしたいなというふうに思ってます。

もう一つは、アクティブラーニング、冒頭お話がありましたように、答えをワンフレーズで伝えるのではなくて、投げかけて自分たちで考えていくと。こういった教育も今後益々重要になっていくのではないかなというように感じておりました。こういった教育を小学校とか中学校とかはもちろん、高校でも継続して行っていき、そしてスピーチや自主的な行動ができる企業人に是非なごやっ子にはなってもらいたいなというふうに思っております。

私の印象をお話させていただきました。以上でございます。

(司会者)

どうもありがとうございました。このスピーチに関しましては、これからもワークシートなどを作成して、皆さんにそれができるようなワークシートとして皆さんの手元に、作成していくということです。

さあそれでは続きまして、野田委員にご意見をお伺いしたいと思います。野田委員には、子どもの貧困についてどのようにお考えかというところなんですが、学校の教育（現場）出身で、教員出身ということもあって、いろんな子どもたちに向き合ってこられたと思うんですが、これから教育委員会としてはどのように向き合っていくかというのを教えていただきたいと思います。

(野田敦敬委員)

はい。私は95%の方なもんですから、なかなか思い切ったこと言えませんが、よろしく願いいたします。

まず、子どもの貧困問題にいく前にですね、今までの問題を横に置いておく、そう市長言われました。もちろん、良さを取り入れることは非常に大事で、私もとても大切だと思いますけれど、やっぱり歴史、市長の好きな歴史を考えることも大事じゃないかと思います。

日本の教員は、今の言葉で言うなら、朝7時からそれこそ夜の9時過ぎまで、チーム教員として、ずっと子どもと対峙してきたわけですね。私は実は、平成5年にこの名古屋市の教員だった頃に、名古屋市の予算をいただきまして、8週間、アメリカに勉強しに行かせていただきました。うち4週間は、学校にどっぷり浸かっておりましたけれども、やっぱり違ったのは、チーム教員

にはなっていないっていうことと、それから、子どもの数が半分くらい、ということですね。そういうのが大きく違うところで、そのチーム教員として多くの子どもを育ててきた歴史の上で、考えなきゃならないことじゃないかなあと。

今、国も取り組んでいるチーム学校ですので、学校の中でどっちが上か下かかってのは私もないと思います。市長の言われるとおりでと思いますので。その中で、より良い方向に行くのが大事なんじゃないかなと思います。

さて、私に与えられたテーマですけど、といいますか選んだテーマですけども、先ほどのスライドでも子どもの貧困率がどんどん上昇している、16.3%。で、1回目の調査より0.6%上昇していますので、どんどん上昇していくんですね。知識とか技能はもちろんですけど、今言われている思考力・判断力・表現力、あるいは学びに対する意欲とか言われていますけど、これが家庭の環境だとか、家庭の経済状況にすごく影響しているんだっていう指摘があるんですね。そうなりますとやはり、そういった（貧困などの問題を抱える）子どもたちに、学習支援講師というのを名古屋市が配置しておりますけど、これも充実させていく方向で進める必要があると思います。それからこれも全庁的にというふうに大綱の2番目の所に書いてありますので他局とも協力しながらですね、今、生涯学習センターなどで支援を行っています。

実はうちの研究室の学生も、それに行ってるんですね。それで、彼女に、「どうだ」っていうふうに聞きましたら、「とても、子どもの生活環境を理解するにはいい機会です。」と「教員になって絶対役立つと思います。」ということでそんな言葉が出ました。「どういう子が来てるの」と聞くと「とても優秀な子もいます。それから、私は専門家じゃないんですけど、ちょっと発達障害があるようなお子さんも来ています。外国籍の子ももちろん来ています。そういう子たちが一生懸命勉強しています。」という答えが返ってきました。

市長言われるようにエデュケーションが子どもの才能を引き出すということですので、是非全ての子どもに、その才能を引き出す機会ということで、とても良い取組であるし、今後充実させていく必要があるなというふうに思っております。

それから、これは自論ですけど、低学年の2年間ですかね、そこで生じる学力差ってのは、かなり、後々効いてくるんだと思うんですね。低学年って言いましてけれども、もっと前からかもしれません。この間、第一幼稚園の研究発表会（全国幼児教育研究協議会東海北陸保育研究会）を小栗委員、船津委員と一緒に見に行ってきましたけど、とても良い保育をされています。そういった小さい頃から、いかに充実させていくか、特にこれも中教審の審議の中に、特に低学年の頃に生じた語彙力の違い、これが後々すごく影響してくるっていうようなくだりもありました。

本市は、30人学級、低学年を30人学級でやっていますが、是非こういった低学年教育の充実を図っていくことが、子どもの貧困に対応するっていうんですかね、そこからつまづかせないっていう大事なポイントだと私は思っています。以上です。

（司会者）

野田委員、どうもありがとうございました。

それでは続きまして、船津委員にお伺いしたいと思います。船津委員は日頃から、大学生の就職に関する質問などの相談も多々受けていると伺っておりますが、将来の針路を応援するということも、うたってありますこの大綱なんですけど、どのようにこの教育委員会に取組としてされていこうとされているんでしょうか。ご意見をお願いします。

（船津静代委員）

はい、私、今お話にありましたように、大学で就職相談を担当しております。最近よく感じるのは、大学の就職相談、割と就職率のいい大学にいますけども、相談は2週間先までいっぱいなんです。一日中学生に会っているんですけど、結果から言うと、元気に就職していきます。一時的に私たちに会ってくれて、羽を休めたりとか、わからないことを聞いて行く。ある時期から、非常に相談する人の垣根がぐっと下がって、相談に来る学生たちが増えたタイミングがあったんですね。キャリアカウンセラーたち、皆で、どうしてなんだろうって話をしていて、やっぱりそれまでの（小中高等）学校で、スクールカ

ウンセラーという制度で、何かあったときにそういうところで相談した経験があるとか、使った経験がある子たちは、何かあったとき、相手にそれを求めていいんだっていう、自分の存在自身大事なんだっていうのが分かって、相談に来る学生たちが増えているのではないかと思います。そういう学生たちは、まあ有名な企業さんにも就職して行かれたりしています。

一方で、見ていて先ほど齋藤先生が最近子どもが幼稚になってきているんだって話があって、大学生は心配いらないってお話もあったのですが、そうは思えなくなってきました。もう大学生でも、言葉がなんだか薄いと思う学生たちが残念ながらいいます。でも私たちは全員の就職を支援していますので、人生はどこでもやり直しがきくと思っていますので、心配はしていないんですけど、なんでこういうふうに薄いんだろうって思ったときに、言葉を字義どおりにとらえてしまうという傾向があるのかと思います。言葉の裏側にその人がどんな意味があってものを言っているのかとか、そういわれても、齋藤先生も昔はこうガーッと行って、バウンドして返ってきたところから始まるんだって話ありましたけども、それもなくなるとそのシューっと字義どおりにモノが入って行ってしまおうと。その影響か、ハラスメントの問題とか出てきてるのではないのでしょうか。その違いは何かなって思うと、やはり、それまでに学校だったり、家庭だったり、大人にものを聞いてもらった経験があったりとか、いろんな会話をして行って、その言葉にどういう意味があるのかということ、ああいう意味かな、こういう意味かなって考えてきた子たちは、自分でものを考えて、前に進んでいけるのではと感じます。

そういう点でいいますと、学校の中に応援委員会が設置されて、先生の仕事を奪うのではなく、立場の違うところから、つまりちょっとお節介な人たちが学校に入ってですね、子どもは、人を選んで話をして、あっちいって見たらこうだった、こっちいって見たらこうだったっていう経験をしながら、あ、自分はそういうことを聞いてもらえる存在だし、応援してもらってるんだと思えるとういと感じます。先ほどからの子ども応援大綱も、応援応援って言ってますが、子どもたち自身がやっぱり応援されているんだっていう実感がない限りは、これ空回りで終わっちゃうと思います。そういう点で子ども応援委員会があちこちからどんどん、入られてから間もないですので、いろんな現場の混乱

もあると思いますけれど、子どもが応援されているんだっていうことを益々実感できるというのが、卒業してからもつながっていくといいなと思わずにはいられません。先ほどスクールカウンセラーの前田さんも子どもが安全に安心して学校に行くというお話がありました。実はキャリアを考えたときに、前に小学校の先生から言われたことがありました。キャリア教育の話を学校にしに行かせていただいたら、「キャリア教育って特別なことではなくて、今までの教育の中には、生きるために必要な力を身につけるっていうことでいうと、教育課程は全てそうなんだ、でもそれをキャリア教育っていう眼鏡をかけて見るといろんなヒントが一本すつと筋がとおるし、発達段階で教えていくことが見えてきますよね。素晴らしい機会だと思うし、それに関わる大人も元気になるんで、一緒にやっていきましょう。」っていうお話をさせていただいたら、先生は「現場は頑張る。キャリア教育にあまり理解のない先生もまだいるけど、僕も頑張ろうと思っています。でも、その子たちが家に帰っちゃったら、またゼロからスタートなんです。時にはマイナスから出てくるんです。」そういうふうと言われて、「でもね先生、全ての子どもに平等に機会があるのは学校なんだと。家でどんな問題があっても学校に行って、学校で話を聞いてくれる人がいて、それを信頼できて大人になれば、それはその先生たち頑張ったって言えるじゃないですか。」ということで一緒に頑張りましょうって私は言いました。教育のフィールドが、地域にも広がって行って、昨日私は、応援委員会さんの会議を小嶋先生と見学させていただいて、頑張っていらっしゃるなって思った中に、最近の取組として、子どもに寄り添うだけではなくて、先生に指導をされる、先生とお話をされるとか、PTA（の会）に出ていかれてお話をされるとか、そういうのが応援委員会の力になっていくんじゃないかなと思っています。そうやって地域とつながっていく、杉崎教育長もスクールポリスのお話をされました。私、スクールポリスの方に「どういう仕事されているんですか、学校は5時に終わらないじゃないですか」とお聞きしたら、地域のお祭りに出て行って、PTAの方と一緒に子どもの見守りをしたりするんだと。そういうお話もされていました。スクールソーシャルワーカーの方も、子どもの抱えている問題の裏側にあるものをおうちにつなげていく作業をしているんですとおっしゃっていました。学校が地域の中心になって、それで大人も元気に

なるし、そういう中で育った子どもたちが応援されているっていう気持ちになって成長していくには、子ども応援委員会の取組ってとても大事だと思っています。

最後に実は私、ナゴヤ子ども応援大綱ができた時に（教育委員会に）いなかったのですが、一点すごく気になる点があります。キャリア教育って言って、司会の方からもお話のあった「なごやっ子の育ちと針路を応援する仕組みを確立」ってあるんですが、「大きくなったら何になるの？という将来の針路を応援します」とあるんですけども、大きくなったら何になるのって質問だけをされていると、子どもは正解で答えなきゃいけないって感じたりする。だから大きくなったら何になるのっていうふうには聞く以上は、そこに寄り添って、その子たちの言っていることがどんどん変わっていくのに付き合っていくってあげなきゃいけないと思います。ご存じだと思いますけれど、アメリカの研究の中には、今の職業は、子どもたちが大きくなったら、ものによっては45%、ものによっては65%もなくなっていると発表されています。そういう中で、大きくなったら何になるのということを、今、問いただすことが、本当に必要なのかなあっていうのがちょっと気になります。この文言でいうと、「大きくなったら何になるの？」っていうくらいに、一緒に聞いてあげるくらいの文言に変えていただけると、最初の齋藤先生の質問力でいうと、「大きくなったら何になるの？」って一緒に考えてあげられるとよいと思います。そういうことを教育委員会の文言として盛り込んでいただけたらと思いますので、河村市長、ちょっとお考えいただきたいと思います。以上です。

（司会者）

ありがとうございました。船津委員は平成27年10月から就任ということですから、そのときいらっしゃらなかったということで。まだまだ改善する点があるということで、良くなる可能性があるということで。貴重なご意見ありがとうございました。

さあ続きまして、梶田委員にお伺いしたいと思います。梶田委員は、企業経営者である一方で、歴史や文化にも大変造詣が深いと伺っております。歴史や文化を大切にすることを育むということが掲げられていますが、そのためにどの

ように、伝えていくのがいいのか、そのための教育委員会での役割についてご意見を頂戴したいと思います。

(梶田知委員)

はい、梶田でございます。

話はだいぶこれまでとは変わりますが、7月に都市ブランドイメージ調査というのが発表になりまして、名古屋市の順位というのは、8都市中最下位。しかも、魅力度、魅力ある街のアンケートを取りますと3%の人しか名古屋と言わないという、大変このアンケート調査の結果は悲惨なものでした。でも、私はそうじゃない、本当に8都市の中ですごく魅力のある都市だろうな。ただ、教えられていない、教えていない、ということかなと。私も海外に行くことがよくありまして、海外の方から名古屋について質問されると、名古屋の魅力は何ですかということをよく聞かれるのですが、以前はトヨタ自動車、トヨタ自動車が愛知県にあって名古屋はそのすぐ近くのまちです、ということが自慢話だったのですが、最近、教育委員会で勉強させていただく機会があって、今ではトヨタ自動車の源は名古屋まつりにあり、というふうに考えるようになりました。

名古屋まつりは、先月も本当にすごく盛大に三英傑の行列を始めとして、山車揃だとかそういったものが行われて、大変、大勢の人たちが集まっています。皆さんのお手元には、今日、「文化財ガイドマップ」というのがあると思うのですが、ここには名古屋の山車行事のことについて説明がされています。今でも名古屋では、12の町内で30両の山車があると、昔から引き継がれている山車が30両もあるんです。この名古屋まつりで、そのうちの数両が山車揃として出されるわけですが、名古屋まつりの原型は、400年前、徳川家康の3回忌の時に名古屋に東照宮が建てられた、その時に、大八車を2両組み合わせ、西行桜の能人形を飾った山車が引き出されたことに始まるんだそうです。その翌年に、この能人形を飾った山車が進化をいたしまして、弁慶と牛若丸が五条橋で大立ち回りを演じるからくり人形を載せた行列を行った。これが大人気を呼びまして、周りの各町内が競うようにしてからくり人形の載った山車を作り出して、それがどんどん、どんどん発展をしていったんだそうです。

250年の間にお祭り好きの徳川宗春だとか、徳川齊朝だとかいう、本当にお祭り好きの大名が現れまして、益々発展をして、250年間の最後の頃には総勢6,800人が行列をつくったということです。そのときに名古屋にはからくり人形を作る専門の技術者、職人がたくさん現れまして、名古屋はからくり人形の大産地となっていたと。それが、おそらく名古屋、愛知県のものづくりの原点ではないか。からくり人形の技術が、いろんな分野に波及して行って、そして、これは私の想像かもしれませんが、トヨタ自動車を産んだのではないだろうかということだと思います。

先ほども言いましたように、今でも山車祭りが12か所、30両で、名古屋で行われている。先日も世界遺産の無形世界遺産登録に、たくさんの山車だとかそういったものが登録されましたが、残念ながら名古屋の山車が一つも入っていなかったのが本当に残念であります。こんな素晴らしい文化、歴史を持つ名古屋を、まず、ちゃんと名古屋の子どもたちに教えて、その子どもたちが世界、他府県に行って、そして世界に行って、名古屋のこういった歴史や文化、伝統というものをちゃんと引き継いでくれる、そしてまた、ものづくりにも興味を持って、そして今後の名古屋の経済を支えていってくれたらなど、そんなふうに思っておりますので、是非、歴史を教える、文化を教えるということの重要性というものを認識しながら、教育を進めていってほしいなと感じております。以上です。

(司会者)

ありがとうございました。さあそれでは最後に、小嶋委員にお伺いしたいと思います。小嶋委員はですね、今年10月から委員にご就任されましたが、これまで医師として心の問題に向き合ってみえた経験、そしてですね、ご家庭では児童・生徒の保護者としていろいろなご意見をお持ちだと思いますが、小嶋委員のお考え、そして抱負をお願いしたいと思います。

(小嶋雅代委員)

ありがとうございます。なにしろ新人の委員なものですから、大変緊張しております。

名古屋市ではというより、名古屋市でも痛ましい出来事が起きて、これまで名古屋市として、名古屋市教育委員会として、いくつものいじめ・自殺予防の対策というものを積み上げてきたということは、今日、前半の方でご覧いただいたとおりでと思います。

新人委員として、個人的に思うことを、この短い間ですけれどもこの問題に向き合ってきて思うところを述べたいと思います。私自身、思うこととしては、いじめ・自殺予防対策といった具体的な対策というのは、とても大事であると思うのですが、それと並び、まずやはりこれは健康というもの、健康というのは心身の健康、表裏一体で、児童自身がまず健康の大切さ、そのための健康な生活習慣というものがどういうものなのか、そしてそれを身に付ける重要性というのを、これを低学年のうちから学ぶ、これは保護者と一緒にだと思いますが、学ぶ必要性があるのではないかと、というふうに深く思います。その上で、健康の大切さ、命の重さ、多様な個性を持つお互いを尊重する、共に協力して社会を作り上げていく、ということが分かっていくと思います。それを小学生低学年のうちから重ねて、重ねて、考える機会というのを小学校では設けるべきではないかというふうに思います。

そうやって考えていきますと、これは健康なまちづくりと同じことではないかと。私、公衆衛生が専門ですので、今まで考えてきた健康なまちづくり、名古屋市としての健康増進政策と全く何ら齟齬がないことであって、その今、超高齢化社会を迎えるに当たり皆様ご存じかと思えますけれども、今、国を挙げて地域包括ケアシステムというものの構築に力を入れております。認知症を抱えたり要介護の状態であったりしても、地域でいきいきとお年寄りが暮らせるようなシステムを作ろうと頑張っており、かなり体制が整ってきたところであると思います。

名古屋市ではいきいき支援センターというところがその中心になって、各区に回ってやっているわけでありましてけれども、全くこの子ども応援委員会も同じようなシステムで考えられるのではないかと。学校を核として、子ども応援委員会と先生方が協働して、地域の子ども、これは子どもだけに限らない、一緒にお年寄りも、働く方、皆一緒のことですよね。心と体の健康を皆で応援してい

く、っていうようなことが考えられないか。あ、皆一緒だ、だから皆一緒に健康に楽しい名古屋にできるんじゃないかっていうふうに考えています。

(司会者)

どうもありがとうございました。

皆様のご意見伺っていると、本当にそれぞれがどれも大切、どれも重要な役割を持っているご意見を頂戴したなあと思っているんですが、教育委員会では、教育振興基本計画という法律に基づく計画を定めているんですね。その委員の皆さんのお考えを、施策・事業としてどのように進めていくのか、改めて事務局代表でもあります、杉崎教育長にお尋ねしたいと思います。

(杉崎教育長)

計画がどうかということなんですが、今、各委員の方からも意見がありましたように、やはり、子どもだけでなく、高齢者とか障害者とか皆がこう元気である名古屋のまちというのがいいのかなと思ってまして、皆さんの元気が名古屋の元気だということで、私どもメンバーでいつも話し合っておるんですが、私は28年4月の教育長就任の挨拶でも申し上げたのですが、市長は教育委員会のことをエデュケーション委員会とかおっしゃっておりますけれど、私はそのときに人生応援委員会というのがいいのではないかと、話をしました。やはり子どもさんだけじゃなくて、高齢者の皆さんや障害者の皆さんも教育に限らず歴史、文化ですとか、スポーツですとか全ての面でこう、元気に暮らすことができるような、そういうまちであるべきかなと思ってまして、そういう同じ方向を向いて教育委員一同頑張って、この名古屋市の教育振興基本計画をしっかりと実行していきたいなと思っております。以上です。

(司会者)

ありがとうございました。もっともっと皆様のご意見とか、皆さんからもいろいろご意見を頂戴したいなと思うのですが、時間が残すところあとわずかとなりました。最後になりますが、河村市長、統括してご意見を頂戴したいと思います。

(河村市長)

総括するような立派な人間じゃありませんので、なんですけれども、今の日本のエデュケーションが成功しとるのかどうなのかちゅうか、なかなか悩ましいところですね。一応経済力が強いもんだから、それはそれで、日本の財政危機というのは嘘ですから。圧倒的に金を持っておる国はこれ日本、ということなんだけども、そういう中ではまあ一応やっとりましますけど、どういふか、右に倣え的なのはたくさんありますしですね。子どもさん、まあ忙しいわ、みんな、本当に子どもが。学校二つ行かないかんで、塾の先生は立派ですけどね、私は大好きなんですけど。何の保障もないのにどえりゃあやってるもんです。それはそれということですけど、いじめの方の方でいうと、私はよう訳分からんのは、指定都市市長会というのがあるんですよ、政令指定都市20都市ありますけどだいたい人口100万くらいの都市がね。そこへ行って2回行ってきたんだわ、公式に。名古屋ではこういう取組をしてますよ、といじめに対してということで、専門家を養成しながらといつて、是非見に来てくださいと。そこでいろんなこっちはこっちで学ぶこともあるだろうし、アドバイスもしますよといつて、2回言いましたからね。で、何市が来たと思います、20市ありますけど、政令指定都市。ゼロですね。ゼロですわ、2回とも。これが現状ですよ。わしは、これ、どうなつとるんだと、いっぺん神戸の市長がですね、前、総務省だで分かつとるんで、わしがトイレに入ったときに横に来まして、子ども応援委員会、どういうふうにつて聞いたことがありました。現実的に見においでになったところはゼロ。大阪市はこないだありましたけど、あれは名古屋城、まあ大阪城の方がほとんど民営化して大成功しておりますんで、それに対してと、こっちからも行って、ということで代わりにいっぺん応援委員会を見に来てということで、二人来ましたけど、まあ無理ですわとか言って帰って行つたと、いうことでしょう。ほんだでねえ、本当にうまいこといくんかね。わし、本当に心配してますよ、実際。こんなふうだもん。トヨタの車はええやつを作らんと、これはフォードやGMに負けますから、日本でいえば、ホンダのCVCCエンジンのほうが早かつたんですけど、負けましたから、競争が働くといいんだけど、独占の世界でですね、そんな税金で食つとる人間ばっかですね、本当にこれ子どもが自立してと口で簡単に言いますけど、本当に

そういう社会ができてくのかと。幸せな子どもはいいけど、いろんなことで体が不自由であったり親が離婚したりと色々な苦しみがあるところで、そういう子どもさんたちにも等しくチャンスが与えられてですね、伸びてくふうになっていくと、いうふうに本当になるんかね。わしはね、相当疑問を感じるんですね、実は。

だから、よほどの気持ちを持って取り掛からないと。マスコミもほぼゼロですよ、報道は。ゼロです。そういうことでちょっと新たなことを言います、いま杉崎が言っただけ、子ども会連合会が非常に協力してくれて、これどういうことか言いますと、一番最初に分かったのは、こないだ西区のある中学校で一人亡くなられたわね、子どもさんが自殺しちゃったあのときに、批判したマスコミがおったけど、何を言っただと、教育委員会だけの独占じゃないぞとこの子どもの命はと言って。そいで私直接入ってきました、8人くらいの、校長始めヒアリングしましてね。あ（ヒアリング）の時にそのへんの（子ども会の）ところ、あれで行きましたけど。

ある人がですね、そこじゃないけど、違うとこの民生委員のお偉いさまですよ。悪いけど学校の先生がいろいろ言っただと、今、大きな問題はお母ちゃんが大変ですね、みんな、ろくでもない親父と結婚して別れてですね、夜8時、9時まで働いとるんだと。だから、学校に来い言っただと来れんじゃないですかと。だから夜8時9時に家庭訪問せないかと。だけど、学校の先生も行ってないじゃないかと、行った人もおるかも分かりませんよ、その人が言ったのは、ほとんど夕方帰ってくじゃないかと。夕方かちょっと夜か知りませんけど、そういうの作らないかんわ一いうて、だで、SSWの出番だと思っただけど、SSWも今度、真ん中でやっていただいておるけど、課題とすると地域の人じゃないから。問題は、例えば、不登校になったときに僕らでいったら古出来町だったら祭りやってまして、祭りずっとやっただと、祭りにでも出てきたらどうかと囃子の練習にと言っただと、出てきませんよ、そんなの本人に言っただと。一緒についてあげると言わないとだめなんですよ。だから子ども会の人のおええところは、明日ソフトボールの練習があるでね、一緒に私がついてあげると、来たたらどうと、例えば。そのような活動をスタートすると、いうことで、これは世界で初めてになると思っただと。子

ども会はどうもないようですので、これも一ついいし、今はもう次の段階を考えておまして、何かというと夜8時、9時というと女の人が行くには大変苦しいわね。多分、相当問題になつとる家庭が多いと思うんですよ。だで、消防団は女性もおるけど男がほとんどですけども、地元の男でおっさんでトレーニングされてますから、是非いっぺん、子ども応援委員会のスクールソーシャルワーカーなりスクールカウンセラーとそれから子ども会の人とそれから消防団と行って、どうだと、明日ソフトボールの練習があるで、出てこりゃあと、わしがついて行ってあげるでと。そういうようなことができんかと、いうようなことをいっぺん。血も涙もある、そういう展開をしていこうということで今お願いしとるところでございますけど。そんなことでよ、歳も取ったで、がきんちよが立派になっていくことが全てでございますんで、そういうことでやりますんで、是非一ついろいろ、またなかなか大変ですわ、これは本当にね。

(司会者)

大変だからできるかなあ、って市長言わないでやってほしいと思ってしまいます。私、保護者ですから巻き込んで、地域の人を巻き込んでやっていくしか多分ないのかな、点じゃなくて面でというところだと思うんです。

(河村市長)

数であんまり言っちゃあいけないけど、昨年まで2年間で1,800人超えましたからね、take careしてる子どもさんの数。相談件数は10,000件近くて、うれしいことかどうということか知りませんが、また今年倍くらいになるみたいで、年間1,000人の子どもさんの悲鳴に応えているということで、これほんで何が分かるかいったら、これあるのは日本中で名古屋市しかないですから、こういうのは。他の都市は学校の先生と一緒にやっとるんだらうけど、ほんと大丈夫かね。これ感じますよ。すぐにお金がない言いますが、嘘です。これは。財政局は嘘ですから。

(司会者)

きっと課題っていうのは本当に、きっと市長もいっぱい持ってらっしゃると思うんですけども、一つひとつ本当に着実にということ。

今日この会場にお越しの皆さん方にも、言いたっていうご意見なんかもあると思うんですが、ちょっと時間の関係上、ご感想という形で。1名くらいいけるかな。1名なら。はい。いけるってことで。もしご感想がいただければと思って、皆さんからのお声を頂戴したいと思いますが、すごく早かったので、いいですか。こちらの前から1, 2, 3, 4列目の、はい、男性の方が。ご意見頂戴したいと思います。ご感想を頂戴します。

(市民)

私、実は昭和区の発達障害対応(支援)員をこの4月から任命いただいて、今、学校の中に入っておりますが、実は、学校の中は、市長がおっしゃるように、本当に先生が大変だな、と。なかなか僕たちは、教育委員会の会議の中でもですね、話をする時間がないということで聞いてはありましたけどね、なかなか話ができない。ということは、実は生徒もせつかく担任があみえるのに教室に入るのに、大変な緊張をしてですね、廊下から来るわけですが、本当に相談したいときに悩みが相談できないんじゃないかな、とこんなふうに思うわけでございますが。市長がこういった応援委員会をお作りになったという経過も分かりましたが、私もESDの中の発展で子ども応援委員会ができたな、とちょっと誤解をしております、今日は来て非常によかったな、と思っております。パートタイムジョブだもんですから、先生ともうまくコミュニケーションができませんが。

実はうちの学校は全国合唱コンクールにおいて入賞しまして、非常に私も栄誉だなと、楽しく思っておりますが、実は、この音楽の先生が大変な指導者でございまして、体育祭、音楽祭、学校行事の中で非常に大事だけれども、この中でよく、合唱の中でパートリーダーを養成したりして学習の楽しさ、そういったものを授業の中で一生懸命に取り入れて、全国大会に入賞してくれたなあって、非常にうれしく思っておりますが。将来の子どもが楽しい学校にするに

はやっぱり授業が楽しくならなけりゃいけない。いくら授業で子どもが成績を取ろうと、楽しくなければいけない。

もう一つは、市長にも申し上げていきたいのですが、今、フェアトレードタウンということで本市は、2つ目の市となったわけですが、フェアトレードというのは、3年生の英語、それから1年生の社会科等々に最近出てくるようでございますが、これも先生方は非常に、簡単にと言いますか、教科書どおりにやられますけれども、もう少し環境教育の視点から、環境サポーターだとか、そういうのにもっと僕たちはノウハウを持っていますんで、そういう意味です、やはりいろんな環境教育のものの中から提案もできるわけでございますが、そういう意味でいろんな形で教育を楽しくするという方法が望ましいなと、思っております。急に手を挙げて申し訳ございませんが、とにかく、名古屋もインクルーシブ教育という言葉を目指して来られるということは先日の研修でも聞いておりますけれども、やはり、多文化共生、こういう点では是非進んでいていただきたいな、と。発達障害あるいは不登校生に対して、是非目を向けて、本気になってね、我々が大人が、やらないといけないと、こんなふうには思っておりますが。時間もないようなので。

(司会者)

大変貴重なご意見ありがとうございました。

(河村市長)

せっかくなんでほんなら、話ときますがね、フェアトレードというのは、まあ、言ってますけど、対義語というか対語はね、フリートレードです。フリートレードというと自由貿易ですけど、自由貿易やりますとですね、完璧な自由貿易やると、どうしても、昔でいうマルクスレーニン主義の帝国主義になるんです、これ。それではいかんと。しかし人類は、そうじゃなくて、フェアトレード、一つの騎士道精神「Captains of Industry」じゃないけれども、やっぱこうしなきゃならないという気持ち、これが自由の領域をカバーしてきたという思想なのです。だから応援委員会でもそうですよ。皆さん、これは僕も自分で言うのもなんですけれども、うちもそう金持ち

じゃないですけども、そこそこ健康に生まれて、そこそこに過ごせて来たという人間は、フェアトレード、ちょっとでも高くても、物を買って、産業を育てていくという思想が必要なんだと。なんだかんだ言って、夜一杯飲みゃあそりゃ幸せでしょう。そういう人間は、やっぱり、例えば、体が不自由だったり、家庭が離婚して大変だった人たちをやっぱり応援する務めがあるんですわ。だから、そういう思想の一環だと思いますよ。だから、そういう教育になっていかなかん、エデュケーションってそういうことでしょう、と思ってますけど。

(司会者)

確かに、フェアトレードは、またここで名古屋から全国に発信している、常にモデルケースというか一番難しいところにトーンと飛び込む名古屋市そして河村市長なんですけど、何と云っても「日本で1番子どもを応援するまち ナゴヤ」ということで、いろいろなご意見あると思うんです。そして大分延長してしまいました。まだまだきっと皆さん、熱い思いがあって、たくさん発信したい方たちもたくさんいると思いますので、是非、それを市長にまとめていただきまして、形にしていただき、私たち保護者も巻き込んでいただいて、より良い子どもたちの環境を作っていきたいなと思っております。

これを持ちまして、ナゴヤ子ども応援会議、閉会とさせていただきます。河村市長、教育委員会の皆様方、そして、西山先生、山野先生、本日はどうもありがとうございました。